

現代文明はバベルの塔である

(以下の話は若い世代全員に当てはまる話ではない。あくまで、ごくごく一部の若者に関する話である。しかし、年々このような若者の割合が徐々に増加していることは間違いがない。)

1. 鬱の蔓延

鬱状態にある若者が多くなっている。

仕事に参加しない、そもそも社会にすら出てこない若者が少なからず存在する。

明確な鬱病の症状があり、本人も自覚しているならば、まず保健管理センターを訪問してカウンセリングを受け、次に心療内科の医院を受診して、抗鬱薬を処方してもらうことができる。

しかし、実際は、怠慢と鬱病との間の境界が明確ではない。

グレーゾーンにある状況の若者が大半である。

重症の若者に限って、保健管理センター等を受診することがない。

そもそも学校にすら出てこない。

電話をかけても、メールを送っても応答がない。

漠然とした自覚症状はあるが、治癒したい、という意欲が希薄である。

怠けている若者は社会を甘く見て、さぼっているだけなのか、心の病で、どうしても身体を動かすことができないのか、はっきり区別できない。

若者の倦怠感の原因は明確ではない場合がある。

そこで原因を探し求める。無理にでも原因を作りあげようとする。

先生に叱られたから、××くんと不仲になったから、鬱になった、と訴える。

しかし、ほんとうの鬱の原因は他にあるのかもしれない。

いったん鬱になると、鬱であることが鬱の原因となる。鬱が鬱を増殖させるという、一種の雪崩現象になっている。

・ 鬱は伝染病？である

組織の中で、鬱にある者の人数が多くなると、健全な者に重い負担がのしかかる。

鬱の者の分まで責務を果たす必要に迫られる。
学校では、教官が大学生を鬱に追い込んだ責任を問われる。
職場では、上司が部下を鬱に追い込んだ責任を問われる。
鬱の者が鬱の者を増殖させるという、一種の雪崩現象になっている。

若者のみならず、軽い鬱になる大人も少なくはない。
意外なことに、つい先日まで快活だった人が、急に鬱になることがある。
誰にでも鬱になる可能性がある。

鬱病は、細菌性の伝染病ではない。しかし、鬱病は確実に人から人へ伝染する。

鬱病を治癒させるにはどうしたらよいか。
せめて、鬱病の感染拡大を予防するにはどうしたらよいか。これは難しい問題である。

・ 鬱の大学生を排除したいのだが・・・

教官は、自分の管轄に鬱の大学生が配属されることを忌み嫌う。
「うち是一流の研究室なので、きみのような大学生が配属されるにはふさわしくない」と、自分の研究室に来ないように勧める。

リンゴ箱の中の、一個の腐ったリンゴは、やがて箱全体を腐らせる。
腐ったリンゴは他のリンゴをも腐らせる前に、早急に箱の外へ捨てるべきである。

しかし、自分の研究室あるいは大学の外へ追いやったところで、別のいずれかの研究室あるいは大学に配属されなければならない。
たとえ、自分の研究室から追い出したところで、社会の中に鬱っぽい大学生が存在する限り、社会全体として見るならば、なんら問題の根本的な解決にはなっていない。
このようにして、鬱の大学生は、教官から忌み嫌われている、と自覚するに至り、鬱をますます増長させていく。

教官は、鬱の若者を排除して、自分の管轄する部署だけが富み栄えるように努める。
しかし、砂漠の中のオアシスのように、周囲の砂漠に囲まれている限り、いくら自分の管轄する部署だけの繁栄に努めても、徐々に、砂漠から砂が押し寄せ、やがてはオアシスも砂漠に飲み込まれてしまう。

このような状況において、わたしは、どのように振る舞うべきか
「医者が必要とするのは丈夫な人ではなく病人である」とある。
しかし、積極的に鬱の大学生を受けいれれば、大学の機能が失われる。

組織の運営が成り立たなくなる。

2. 人間関係が分裂している

鬱の人がいるために、個人個人がばらばらになっている。個人個人の間で意思の疎通ができなくなっている。

他人の視線をひどく気にする。他人が自分をどう見ているのか、に対してのみに強い興味がある。しばしば、極度の被害妄想に駆られている。一方で、他人がどのような人物なのか、他人がどのように感じているのか、については興味がない。

・ 組織がばらばら

組織としての活動が成立しない。
教官と大学生との関係がばらばら。
組織に所属する若者どうしがばらばら。
互いの意思の疎通がない。

・ 親しい友人がいない

大学生でサークル活動に所属している者が少なくなった。
現在では、過半数の大学生が、いずれのサークル活動にも所属していない。
講義が終わるとまっすぐ家に帰る。

友人関係が希薄。
メルトモはいるといえども、ごく浅い関係で、腹を割って語り合うことがない。

生協食堂で昼飯をひとりで食べるができない。
他人の視線が気になって、食事をトイレに持って行って食べることもある。便所飯。

そもそも朝・昼・晩の3度の食事を満身に食べない。
栄養のバランスのとれた食事をとっていない。
食事に対して関心がない。食育が必要。
そこで、定期的に研究室にて、焼き肉パーティ・お鍋パーティを開催して、野菜・肉を自分でスーパーにて買ってきて調理して食べることを教える。

近隣の歩道を歩いていて、多くの若者とすれちがう際に、彼らはしばしば道を譲らない。

しかたなく、わたしが道端によけて、道を譲る。
彼らは傲慢な気持ちから、道を譲りたくない、というわけではない。
彼らには、他人が見えていない。他人に対して関心がないだけである。

ラッシュ時にバスに乗り込む。多くの若者で混雑している。
入口付近は混雑しているが、車輦の後ろの方は、かなり空いている。
しかし、バスに乗っている若者は、車輦の後ろの方へ詰めて、新たにバスに乗り込もうとする人に便宜を図ろうとはしない。
特に悪意があるわけではない。
単にバスに乗り込めずに困っている人に対して関心がないだけである。

・ 家族がばらばらである。

大学生と、家庭の話をするように努めている。
スムーズに自分の家庭の話ができる若者は、精神的に健全である。
しかし、満足に自分の家族の話ができない若者が少なからずいる。
彼らは家族が何をしているのか知らない。
なぜなら、家族が一同に会する時間がない。食事もばらばら。
一家団欒の時間が一週間に一度もない。
家族と会話することがない。家族に対して関心・興味がない。
家族の間でコミュニケーションが乏しいためのようである。

昔、テレビは一家に一台だった。夕食後、家族全員でテレビを見ていた。
ところが今は、家族の人数分だけ、テレビもしくはパソコンが各個室にある。
皆でテレビを見ることはない。
ひとりで個室に籠もり、テレビを見て、パソコンをいじり、ゲームに耽る。

ときどき、職場へ向かう途中で、若い母親が乳母車を押して、近所の公園に来るのを見る。
幼い我が子をブランコに乗せて静かに揺らしている。周囲には誰もいない。
ただ、ブランコの鎖のきしむ音だけが聞こえる。
この母親には、周囲に友人はいないのか。
仕事に追われて毎晩帰宅の遅い夫との間に会話がないのか。
毎日毎晩、ひとりで幼い我が子と向き合っているだけなのか。

3. 個人の心の中が分裂している

個人と個人との間のみならず、自分の心の中がいくつもの断片に分裂している、という事態

に至っている。

その結果、自分自身を制御できないことになる。

・ 自分というものがない

若者には、自分というものがない。興味の持てる対象がない。

主体的に何かしたい、という意欲が湧かない。

他人に強制されて、しかたなくやっているという意識が強い。

なるべく少ない勉強量で単位をもらえる講義科目を選ぶ。

なるべく少ない拘束時間で家に帰らせてもらえる研究室を選ぶ。

一種の、省エネ・エコの精神、といえるのだろうか。

・ その場限りの、刹那的な学習

翌日に迫った試験をクリアすればよい、と思うだけである。

学習を積み重ねていく、という概念が乏しい。将来を見据えた長期的な視点がない。

一度過去に勉強したはずのことを、数年後には全て忘れている。

自分の過去と未来に対する関心がない。

現在に対してのみに関心がある。

過去や未来の自分と、現在の自分とが分裂している。

・ 条件反射

条件反射のようにしか、物事に対処することができない。

論理を積み重ねることができない。論理思考力の欠如。

理系の大学生なのに物理学を理解できない。

論理的思考には、長時間の集中に耐えることが必要だが、大学生は、長時間の集中に耐

えられない。長い時間をかけて、ゆっくりと進むことに耐えられない。

巷にパソコン・携帯電話が蔓延する。

かつて、パソコンはプログラムを作成する道具だった。

しかし、大学生は簡単なプログラムを作ることすらできない。

ボタンを押すだけで、すぐに結果が出ることを好む。

学会の懇親会などで、他の大学に勤める友人と話す機会がある。

他の大学でも、若者は類似の状況になっている。もはや大学のレベルとは関係ない。

同窓会などで、様々な職種に勤める友人と話す機会がある。

他の多くの職種でも、同様の問題に頭を悩ませている。

4. 現代文明全体の問題

上記の問題は、若者などの若い世代に典型的に現れているだけにすぎない。我々年輩の世代もまた、同様の問題を抱えているのではないだろうか。

・ 森有正の著作を読んで

先日、「バビロンの流れのほとりにて」「思索と経験をめぐって」を読んだ。

森有正の著作には、キーワードとして「経験」がある。

セーヌ川をゆっくりと遡上する伝馬船は、一見止まっているように見えても、いつかは視界から消えてゆく。

数百年の長い時間をかけて、石造りの大聖堂を積み上げる。

ところが、現代に生きる我々には、森有正の著作にある「経験」がない。

わたしがここで言わんとする「バベルの塔」とは、森有正の「バビロンの流れ」とは全く違う意味に用いている。

・ 現代人は絶えず時間に追われている

若者に限らず、現代社会に生きる我々は絶えず時間に追われている。

即座に結果が出ることを要求される。ゆっくり熟慮することが許されない。

職業人は、数ヶ月あるいは数年単位という短い期間で、速やかに業績をあげることを求められる。

絶えず時間に追われる生活は、森有正の著作にある「経験」を積み重ねる生活と、全く正反対である。

他人とゆっくり語り合うという「経験」をするためには、長い時間が必要である。

しかも、ゆっくりと流れる時間が必要である。

同様に、自分自身と向き合い、自分とゆっくり語り合う、という「経験」をするためにも、長い時間が必要である。

矢のように時間が飛ぶように過ぎ去っていく生活では、他人とも自分自身とも対話することが難しい。

他人とも自分自身とも対話することがなければ、他人からも自分自身からも孤立していく。人間関係も、自分の心の中も細かい断片に分裂していく。

以上のことは、現代文明の没落の序章なのだろうか。
もはや、個人一人の抱える問題ではない。現代文明が全体として抱える問題である。

おおもとの根源的な原因は何か？家庭における幼児教育にあるのか？
仕事に忙しい父親は、家庭を省みない。
母子が周囲から隔絶された環境におかれる。
夫婦の会話が希薄になり、親子の会話が希薄になる。

いくら、科学技術が発達しても、物質的には豊になっても、人の心が病んでいるのならば、
幸福は得られない。心は豊かにならない。
遠い昔のメソポタミアにて、バベルの塔を建設しようと企てた人々のように、現代文明に生
きる我々もまた、天まで届く塔を建て、有名になろうと画策しているために、このような状況
に置かれているのだろうか？

(気づかぬうちに、ずいぶん当たり障りのありそうな話を述べてしまった。上記の文章は一般的な事柄を問題にしてい
るのであり、特定の個人や団体を対象にしているのでは決してない。まして特定の個人や団体を中傷するつもりは毛頭な
い。もし不適切であると感じられる箇所・表現があるならば、お知らせいただきたい。即刻に訂正・削除するつもりである。)